

^ひ樋 ^{あけ}明 ^こ古 ^{ふん}墳

宅地開発に伴う緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

樋 明 古 墳

宅地開発に伴う緊急発掘調査報告書

1991年3月

長野県飯田市教育委員会

序

道路環境の整備は、生活を便利にする一方、それに伴う開発により周辺地域の環境そのものを変えていきます。中央自動車道、市道知久町中村線等の主要幹線道路が走る飯田市伊賀良地区も例外ではありません。

こうした開発に先立ち行なってきた発掘調査や平成2年度に実施した伊賀良地区全域にわたる遺跡分布調査により、太古より連続と続いてきた人々の生活の痕跡が今もなお数多く、土に守られ地下に眠っていることがわかっています。また、この辺りは文献にみられる伊賀良の庄にあたるとも考えられています。

榑明古墳の造られた古墳時代。伊賀良には盤龍鏡を出土したという大畑古墳を初めとして、かつては52基の古墳が存在し、その多くが中村周辺に集中していましたが、それも次々と姿を消しつつあります。

本古墳は下伊那史の記載にあるように、横穴式石室が残っており、墳頂には小祠が建てられ今日に至っておりますが、宅地として開発されることとなりました。伊賀良のみならず下伊那地方の古墳時代を知るうえでも本来なら現状で保存することが望ましいのですが、周囲の状況からも宅地化されることはやむを得ず、事前に発掘調査と記録保存を行ない、その結果を本報告書として刊行するものです。

最後に、調査実施及び本報告書作成にあたり、多大なご理解、ご協力をいただいた関係各位に深く感謝し、衷心よりお礼申し上げます。

1991年3月

飯田市教育委員会

教育長 福島 稔

例 言

1. 本書は、宅地造成工事に先立ち実施した稲明古墳発掘調査の報告書である。
2. 調査は、大平金十郎氏の委託を受けて飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成2年9月13日～19日まで実施し、平成2年度までに整理作業及び報告書作成作業を行なった。
4. 作業に際して、遺跡名にHAK.Kの略号を用いた。
5. 本書の記載は古墳を主とした。なお、遺構図・遺物実測図は本文中に、写真図版は文末に掲載した。
6. 本書は、ⅠⅡを小林正春、ⅢⅣを渋谷恵美子が執筆した。なお、本文の一部について小林が加筆・訂正を行った。
7. 本書に掲載された図面類の整理・遺物実測等は渋谷があたった。なお、同作業にあたり調査員及び整理作業員が補佐した。
8. 本書の編集は調査員全体の協議の上、渋谷が行ない、小林が総括した。
9. 本書に掲載した石器実測図中の実線は使用痕・擦痕及び研磨痕を示す。
10. 本文中の研究者名については敬称を略させていただいた。
11. 本書に関する出土品及び諸記録は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

本文目次

序	I
例 言	II
目 次	III
I 経 過	1
1 経 過	1
2 調査組織	2
II 遺跡の環境	4
1 自然環境	4
2 歴史環境	4
III 調査結果	9
1 墳 丘	9
2 内部主体	9
3 遺 物	11
IV 下伊那地方の無袖式横穴式石室と榑明古墳	12
1 下伊那地方の横穴式石室	12
2 榑明古墳の石室と古墳の位置付け	15

図 表 目 次

第1図	榑明古墳位置及び周辺遺跡分布図	3
第2図	榑明古墳周辺図	7
第3図	榑明古墳石室位置図	8
第4図	榑明古墳石室実測図	10
第5図	出土遺物実測図	11
第6図	下伊那地方の無袖式横穴式石室分布図	13
第1表	下伊那地方の無袖式横穴式石室	14

写真図版目次

図版1	発掘前の状況、調査風景
図版2	閉塞石を奥壁より望む
図版3	右側壁の石積み
図版4	左側壁の石積み
図版5	石室
図版6	出土遺物

1 経 過

1 経 過

平成2年8月8日付で、飯田市中村177番地久保田公平氏より、飯田市中村208番地に所在する榎明古墳に関して、開発に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協議依頼書が飯田市教育委員会宛に提出された。

それを受け、8月23日に開発主体者と長野県教育委員会及び飯田市教育委員会とによって現地での保護協議を行なった。

現地の状況は、周囲の大半が宅地開発され、当該地は久保田家の氏神として小祠があり、小叢を成しており、周囲は石垣で縁取られ2m弱の高さがあった。その石垣用材は大小の差があり、南側部分はかなり大きな石を用いており、横穴式石室の用材と判断され、下伊那史二巻の記述と一致するものであった。

そうした現地の状況を観察する中で、その取り扱いにつき、諸々の協議を行なった。横穴式石室を有する古墳であることは間違いないところであり、何とか現状で保存ができるか否かの検討を行なったが、周囲の開発状況等から、開発の計画を止めることは困難であり、造成工事実施前に飯田市教育委員会により発掘調査を行ない記録保存して後世に伝えることとなった。

なお、立木等については、発掘調査着手前に事業者が処理することも確認した。

引き続き、市教委では調査実施にあたっての手續等準備作業を行ない、事業者側では立木の処理を行なった。立木の処理にあたり、伐採するものと移植するものがあったが、移植対象となったものが予想以上に根張りしており、大きな石が露出している旨9月6日に事業者から市教委に連絡があり、担当者が現地で確認したところ、石室の一部に影響を及ぼしていることが確認され、調査実施まで現状で保存することとなった。なお、現地は大小の礫が雑然と散乱しており、若干の危険があると考えられたので全周を縄張りするとともに早急に発掘調査を実施する必要があると判断した。

その後、9月10日付で事業者と飯田市長との間で発掘調査に関する委託の契約がなされ、現地での調査を9月13日から着手した。

調査は途中雨天のため中止した日もあったが、9月19日に測量・写真撮影を行ない現地での作業を終了した。

その後、飯田市考古資料館において、図面等の整理作業を行ない本報告書作成にあたった。

2 調査組織

① 調査団

調査担当者	小林 正春				
調査員	佐々木嘉和	佐合 英治	吉川 豊	馬場 保之	渋谷恵美子
作業員	池田 幸子	伊原 恵子	大蔵 祥子	金井 照子	金子 裕子
	唐沢古千代	唐沢さかえ	川上みはる	木下 早苗	木下 玲子
	榊原 勝子	小池千津子	小平不二子	小林 千枝	佐々木真奈美
	田中 恵子	筒井千恵子	丹羽 由美	萩原 弘枝	林 勢紀子
	原沢あゆみ	榎本 直子	平栗 陽子	福沢 育子	福沢 幸子
	牧内喜久子	牧内とし子	牧内 八代	松本 恭子	三浦 厚子
	南井 規子	宮内真理子	森 信子	森藤美知子	吉川 悦子
	吉川紀美子	吉沢まつ美	若林志満子		

② 事務局

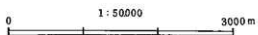
飯田市教育委員会 社会教育課

竹村隆彦	(社会教育課長)
中井洋一	(社会教育課 文化係長)
小林正春	(" 文化係)
吉川 豊	(")
馬場保之	(")
篠田 恵	(")



A. 樋明古墳

- | | | | |
|----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 酒屋前遺跡 | 2. 滝沢井尻遺跡 | 3. 上の金谷遺跡 | 4. 中島平遺跡 |
| 5. 小垣外遺跡 | 6. 八幡面遺跡 | 7. 殿原遺跡 | 8. 梅ヶ久保遺跡 |
| 9. 鳥屋平遺跡 | 10. 宮ノ先遺跡 | | |



第1図 樋明古墳位置及び周辺遺跡分布図

II 遺跡の環境

1 自然環境

榑明古墳は、飯田市中村に所在する。中村は伊賀良地区（旧伊賀良村）の南西端に位置する。伊賀良地区は、飯田市街地の西方に位置し、北方・大瀬木・上取岡・下取岡・三日市場・中村の各地区により構成される。西方は中央アルプスの笠松・高鳥屋山麓により区切られ、北は飯田市鼎に、東は飯田市竜丘に、南は飯田市山本のそれぞれ接している。

西方の笠松山麓からは、当地区を最も特徴づける大きな扇状地を形成している。その扇状地は当地区の中心部付近で終息し、段丘地形による比較的平坦な台地が東方に延びている。

扇状地上は、西方山裾に発達する湧水を起因とする大小の河川より開析され、起伏に富んだ地形となっている。その主なものを挙げると毛賀沢川、新川、茂都計川などがあり、東方に流下し、段丘端部に至っていずれも深い谷を形成している。

いずれの河川も扇状地形成に深くかかわったものであり、自然状態における土石の流出量は膨大であり、昭和36年当地方を襲った集中豪雨の際には、すべての河川が氾濫、大災害を引き起こしている。

榑明古墳は、そうした扇状地の南端部の茂都計川に面した位置にある。茂都計川は西方の山麓から流出し、相当規模の扇状地を形成するが、現在の流路はその扇状地を浸食し、安定した流路を保っている。ちょうど、榑明古墳の位置する付近で扇状地は終り、それより下流では段丘を浸食し更に安定した流路となっている。

榑明古墳は扇端部に位置し、全体の地形は南向きの緩傾斜地であり、この付近一帯は扇状地伏流水の湧水が各所にみられ、それに因る水田経営も古くより行なわれていたと判断される。

また、同古墳の所在する一帯は、標高580mを越えるが、前述のとおり、南向きの斜面であり、その西方には標高772mの二ツ山があり、季節風を受けにくい温暖の地であるといえる。

2 歴史環境

伊賀良地区は、前述のとおり扇状地と段丘とで形成され、山間地及び河川流域の急傾斜地を除くその大半が平坦地もしくは緩傾斜地であり、また、大小河川による起伏に富んだ地形のため、各所に湧水もみられ、原始より今に至るまで生活適地として様々な形で営みのあった姿が推測される。

具体的に捉えられる最も古い資料は、三日市場中島平遺跡から出土した縄文時代草創期の有舌尖頭器であるが、当地区の山麓部から平坦地までの伊那谷の地形的特色を全て有する状況から更に古い旧石器時代に遡る遺跡の存在する可能性もかなり強い。

続く縄文時代は全時期を通じて、様々な資料が地区内各所から発見されているが、それぞれの時代により分布状況の差が認められ、微地形の変化により生活適地の選択がなされていたと推測される。その典型的なものの一つとして、北方の立野遺跡がある。立野遺跡は縄文時代早期の押型文土器を出土した遺跡であるが、その土器は立野式土器として全国的にも著名である。立野遺跡に代表される縄文時代早期から前期にかけての遺跡は西方の山裾周辺に集中して分布する。

次の縄文時代中期から後期の遺跡分布は、地区内全域に広がった姿がある。特に中期の遺跡は西端の山間地内から東端の段丘端部にまで地区内全域の水利条件に恵まれた場所ならばどこにでも集落を形成しているが、種々の条件により集落の大小があり、拠点的な集落と周辺的な集落の存在した可能性があり、その総合的な姿は伊那谷南部の縄文時代中期の様相を地区内ですべて読み取ることができるといえる。

縄文時代晩期から弥生時代中期資料は、いくつかの遺跡で断片的な資料が散見される程度であり、当地区内で希薄といえる。生活形態の変化がこの時代にあったと推測される。

続く、弥生時代後期に至ると再び地区内各所に集落が形成される。その分布状況は、縄文時代中期のあり方と共通し、大瀬木梅ヶ久保遺跡などの標高700m前後の高所にまで広がりをみせており、当地域全体における人口増・生産力の向上等様々な社会様相の変化が感ぜられる。なお、その時代の中心的な位置づけとして、上殿岡殿原遺跡の大集落、大瀬木の滝沢井尻遺跡・酒屋前遺跡にみられる鉄剣を副葬した方形周溝墓・東海系の土器の良好な資料等があり、内的な要因と外的な要因が複雑に作用し合って地域相を形成している。

古墳時代は、かつて52基の古墳の存在したことが知られるが、当地方におけるその中心は、天竜川沿岸地域にあることは否定できず、それらに比べ若干高位の段丘上にある当地区は周辺的な地域として捉えられる。しかし、52基の古墳の存在は、後の時代を考えたとき重要な意味を持つといえる。

それは、律令期における東山道に関連してであるが、当地区は西方の飯田市山本地区を間に置き、下伊那郡阿智村駒場と連続する地形上にある。駒場は、東山道阿智の駅の置かれた地であり、それに次ぐ駅として青良駅の所在地の最有力候補地として当伊賀良地区内のいずれかが考えられている。

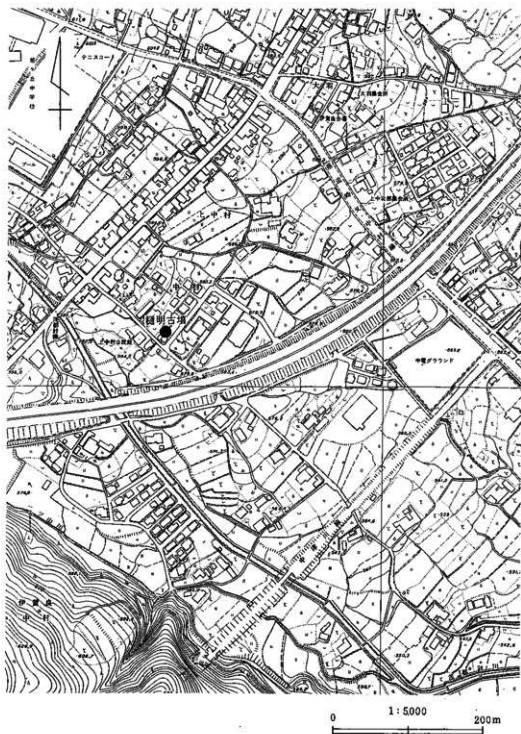
当然、先行する古墳時代において、古東山道ともいえる道筋の存在したことは事実であり、そうした地理的条件下の中に当樋明古墳の存在も大きな意味を持つものといえる。

続く、奈良・平安時代にあつては、前述のとおりであるが、奈良時代の具体的な様相を遺跡調査等によって具体的には捉えられていない実情である。なお、平安時代においては、断片的ではあるがいくつかの遺跡より壑穴住居址が発見されている。

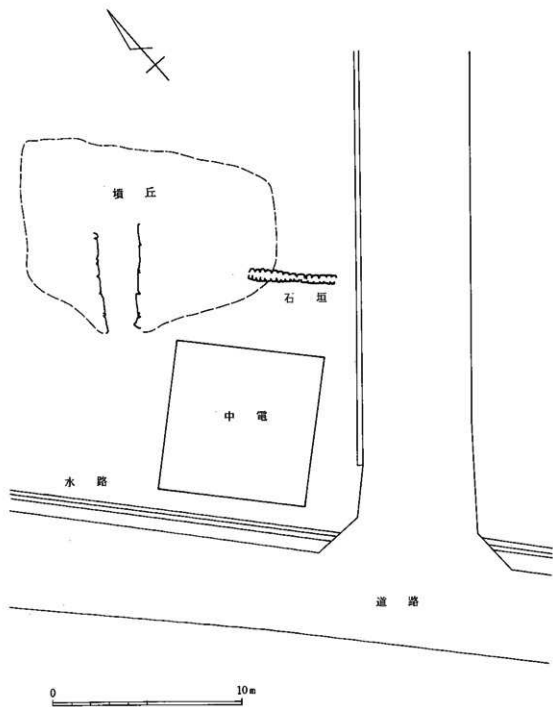
その後、中世に至り、当地区内は伊賀良庄の経営のなされた場所であり、当地方の中心として位置づけられ、戦国期の小笠原氏による地域支配の時代には、その経済的基盤の一方の柱と

しての位置づけがなされる。

中世荘園以降の地域開発の結果、伊賀良地区全域が広範な水田経営の地として確立され、近世の農村としての地域性が明確となり、今に至っているといえる。



第2図 榎明古墳周辺図



第3図 榑明古墳石室位置圖

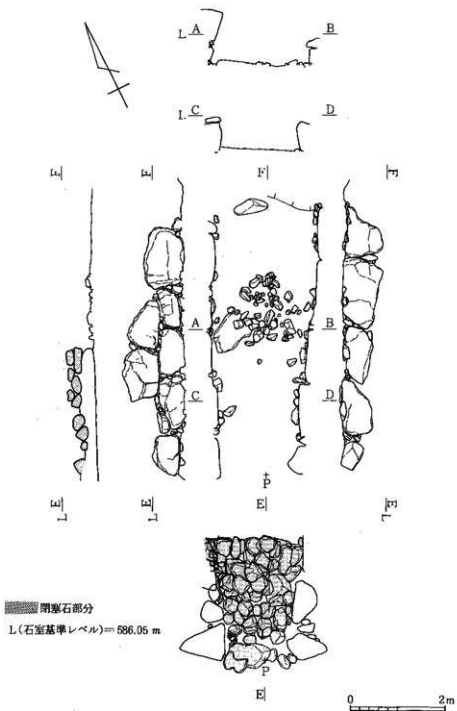
III 調査結果

1 墳 丘 (第3図)

本古墳は、緩傾斜地に立地する、いわゆる山寄せの円墳である。墳丘の上半分はほとんど破壊されているが、現状で長径13m、短径10m程である。『下伊那史』第二巻によると、東西13.6m、南北10m、高さ0.5mとあり、墳丘規模はその当時とほとんど変りはない。本来、13m前後の円墳であつたらう。高さについては、当時すでに削平され、墳頂部に祠が作られているので、正確な値はわからないが、斜面にあることで北側からと南側からとでは見かけの高さが異なり、石室床面レベルと現在南側にある道路との比高が2m程あり、南側から見上げるような場所に構築することによって、より高く、大きく見せる工夫がなされていたのであろう。葦石・周溝は確認されず、前掲書にも記載はなく、実態は不明である。

2 内部主体 (第4図)

主体部上半分は墳丘同様破壊され、土に半ば埋まった状態であつたが、両側壁の一部が確認できた。現状では開口部より向かって左側壁の最下段4石、第二段2石、右側壁の最下段5石を残す。奥壁の位置は確かではないが、石室北端床面に若干落ち込みがあり、奥壁の抜き取り痕かとも思われる。羨道部も上半分が崩れているが、周囲の状況からして開口部の位置はほぼ当初のものであろう。以上、本古墳の石室は等高線に対し平行に構築され、主軸方向N35° E、北西に開口する。石室平面形では羨道と玄室の区別のない無袖式横穴式石室で、現存全長約5m70cm、幅は開口部付近で約1m70cm、奥壁付近で約2m10cm、開口部から奥壁に向かつてやや開く細長い台形状を呈する。側壁は花崗岩自然石を偏平な面を表にして積み上げ、すきまに握りこぶし大の石を充填する。石の積み方は、左側壁で最下段と第二段の石が互い違いに積まれているのがわかる。傾斜地立地による土圧の影響か、特に左側壁では最下段から石自体が内傾しており、かなり顕著な持ち送りを呈する。床面の状況としては、握りこぶし大の石が散在するのみで敷石等の遺構は検出できず、また縄文中期の土器片等が出土していることから石室下には当該期の包含層があり、石室内は後世の攪乱を受けている。側壁最下段のレベルを床面レベルと考えると585.40m前後となる。羨道部では、開口部より2.7mの範囲に石室内部に向かつて面をそろえた人頭大の石による石積みを検出、閉塞石の一部かと思われたが、この石積みは床面レベルから20m程上にあり、この下にも敷石を確認できず、石室内攪乱後に積まれたものである可能性も強い。



第4図 樋明古墳石室実測図

3 遺 物 (第5図)

出土品はごく僅かである。

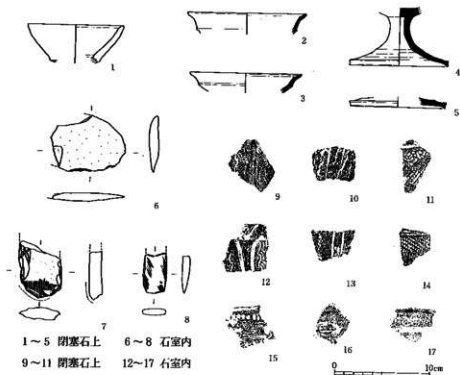
古墳に伴うと考えられるものは、土師器坏口縁部片1点(1)、須恵器坏口縁部片2点(2～3)、同高环脚部片2点(4～5)のみである。閉塞石上から出土した。

土師器坏は小破片であり、径は推定。やや内湾しつつ広がり、端部は丸みをもつ。内外面共に横方向のヘラミガキが施されている。色調は外面が赤みがかった褐色、内面は茶色がかった灰褐色と黒色の部分がある。焼成は良好。

須恵器坏口縁部はいずれも小破片であり、径は推定である。口縁部は八の字に外反し、外面には丸みを帯びた段が、内面には回転ナデを施した際にできた1～2本の稜がみられる。高環の坏部かとも思われる。高環脚部は八の字状に広がり、端部は段をなす。透し孔はない。これらはいずれも灰白色で焼成は良好。

遺物は少なく、出土状況からも古墳の年代の決め手を欠くが、7世紀前半を下らないと考えられる。

その他に、横刃型石器1点(6)、打製石斧1点(7)、磨製石器1点(8)、縄文中期の土器片数点(9～17)等が出土した。



第5図 出土遺物実測図

IV 下伊那地方の無袖式横穴式石室と埴明古墳

1 下伊那地方の横穴式石室 (第6図・第1表)

当地方における横穴式石室については、今までにいくつかの研究がなされている。(参考文献参照)横穴式石室の導入は6世紀前半とされている。無袖・片袖・両袖の3タイプがあり、そのうち無袖式は当地方では最も一般的なものである。現在16例が確認できる。(埴明古墳を除く)

特徴

- ① 石室底部平面形は、開口部から奥壁に向かって広がる縦長の台形状を呈する。
- ② 平面形・側壁の積み方による玄室・羨道の区別はないが、天井石の残るものを見ると、天井石を一段下げること、両者を区別していたものと思われる。
- ③ 側壁は、基本的には1~1.5m程の花崗岩自然石を不規則に三段以上積み上げることによって構成されており、すきまには径50cmから握りこぶし大の石が詰められる。
- ④ 持ち送りが見られ、奥壁は見かけ上台形となる。
- ⑤ 石室の全長は、おおよそ5m以下のものと7m以上のものとの2つに分けられる。高さは、全長の長いものは比較的天井も高いという傾向がある。幅は、全長の長短にかかわらず、奥壁付近で平均2m前後となる。
- ⑥ 円墳、前方後円墳ともにその例があり、前方後円墳の場合には、おかん塚古墳・馬背塚古墳のように一古墳二主体部のうちの一つとして用いられる例がある。

問題点

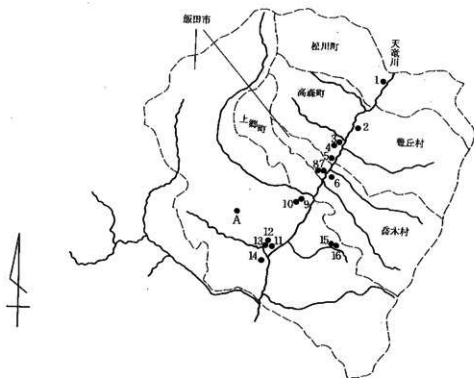
① 石室構造について

基本的には1~1.5m前後の大型の石を横積みするが、積み上げ方には一定の規則性は認められない。(下辻古墳は全体にやや小振りの石を用い、塚穴1号古墳は側壁の下半分には大型の石、上半分には小型の石を用いて構築されているが、これらは特殊なものではなく、入手し得た石材の大小、立地上の制約などによるものであろう。)松尾論文では側壁の腰石(最下段の石)の規模の変化が問題とされているが、石室規模の大きいものほど大きさのそろった大型の石が使われているという傾向はある。この石室規模の拡大は無袖式の場合、幅にほとんど変化がなく、全長の延長によってなされるのが特徴である。

無袖式石室は、墳丘規模の大小の差異に起因するとすれば、石室規模も時間差の中で捉えられる可能性は否定できないが、基本的構造という点ではほとんど時間的变化は認め難いといえる。

② 石室のあり方について

前述のように、下伊那地方には一つの古墳で二つの石室を有するものが存在する。(おかん塚古墳・馬背塚古墳) 主体部の一つが無袖式石室で、もう一方が白石論文によるところの畿内の横穴式石室の影響を受けた両袖式石室である。この論文で、馬背塚古墳の例をあげて、前方後円墳における後円部の優位性から後円部石室が前方部石室に先行することを指摘し、編年の示標としており、おかん塚古墳では前方部が消失し、現状での検証困難な点はあるが同様といえる。いずれにせよ、無袖式のみ、両袖式のみを有する円墳または前方後円墳、両者を有する前方後円墳という、墳形と石室の関係から無袖式石室の性格を考える上で、二つの石室を有する古墳の存在は重要である。



- | | | | |
|------------|------------|------------|------------|
| 1. 屋敷添古墳 | 2. 家の上古墳 | 3. 北林2号古墳 | 4. 金部1号古墳 |
| 5. 武陵地古墳 | 6. 郭1号古墳 | 7. 石塚1号古墳 | 8. 石塚2号古墳 |
| 9. 上藤天神塚古墳 | 10. おかん塚古墳 | 11. 金山1号古墳 | 12. 馬背塚古墳 |
| 13. 御嶺堂古墳 | 14. 下辻古墳 | 15. 塚穴1号古墳 | 16. 塚穴2号古墳 |
- A. 榎明古墳

第6図 下伊那地方の無袖式横穴式石室分布図

古墳名	所在地	墳丘		石室			備考	
		形態	規模	全長	石幅			高さ
					真	入口		
屋敷系古墳	下伊那郡松川町	円	10.7~14.0+	4.63+	2.0	1.6	1.55	
家の上古墳	"	円	17.0~18.5+	8.8	2.1	1.3	-	
北林2号古墳	"	円	12.7	7.12+	1.8	1.5	1.64	
金部1号古墳	"	円	20	4.55+	2.0	1.5	1.2	
武段地古墳	"	円	16.9	9.09+	2.15	1.15	2.9	
郭1号古墳	" 需木村	方円	-	11.25+	2.3	1.6	2.75(1.3)	後円部
石塚1号古墳	飯田市座光寺	円	21.8	8.5+	2.5	1.7	2.5	
石塚2号古墳	"	円	32.7~22.7	8.75+	2.51	1.88	2.25	
上溝天神塚古墳	松尾	方円	60	10.7+	2.1	1.6	1.8+(1.1+)	後円部
おかん塚古墳	"	方円	41.8	3.1+	1.3	1.4	1.8	前方部
金山1号古墳	" 上川路	方円	推定63	3.64+	1.21		0.76	後円部?
馬背塚古墳	"	方円	46.4	11.7	1.9	2.7	1.8(1.4)	後円部
御旗堂古墳	"	方円	66	12.95	2.3	2.15	2.85(2.1)	後円部
下込古墳	" 川路	円	11.8+	8.8+	2.2	1.5	2.65	
塚穴1号古墳	" 上久堅	円	推定20	7.0	1.92	1.74	3.15	
塚穴2号古墳	"	円	-	2.9+	1.72	-		

注：本表は、「下伊那史」第二巻、松尾他「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」を基に作成

+は破壊による現状での値であることを示す。

高さは最高値、()内は天井石が一段低くなっている箇所での値

(単位m)

第1表 下伊那地方の無袖式横穴式石室

③ 石室形態の把握について

現状で16例ある無袖式横穴式石室について、最も基本的な問題として、その形態の把握に関して一考を要する。それは、羨道部形態の把握についてであるが、現在開口している石室の多くは、閉塞石もしくは、土砂等により入口部分の石室底部形態の把握が困難なものも多く、また、その部分の欠失した可能性の高いものもあり、片袖式である可能性を否定できないものがある。今後の清掃調査等により新事実の指摘される可能性がある。

2 樋明古墳の石室と古墳の位置付け

本古墳の石室は、規模の上では7m以上の大型のグループに入る。側壁の上半分が破壊されているため、他と比較しにくい。規模的には塚穴1号古墳に比較的近いようである。典型的な無袖式横穴式石室の一例といえよう。また、第5図の分布図をみると他形態の内部主体をもつ古墳の集中する天竜川流域を主に無袖式横穴式石室も分布している。一方、本古墳および天竜川をはさみ標高700m近い上久堅塚穴古墳など、当時、地域の中心から若干離れた感のある地区においても無袖式横穴式石室を用いている。この事は、古墳時代後期のある段階において、当地方の石室形態が統一された姿が強く推察される。

樋明古墳の石室は、かなり破壊が進行しており、不明瞭な点もあるが、西部山麓地域における最初の横穴式石室の調査例であり、その形態が無袖式であるという事実を把握し得たことは、今後の地域全体における横穴式石室の、さらには古墳文化の研究に大きな一石を投ずるものといえる。

参考文献

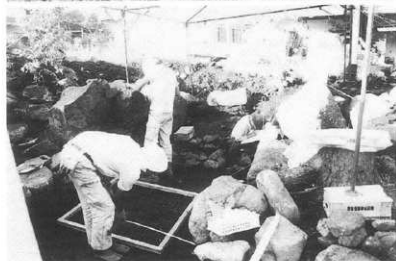
- 1 市村威人『下伊那史』第二巻・第三巻 1955年
- 2 長野県史刊行会『長野県史』全1巻(3) - 主要遺跡(南信) 1983年
- 3 大沢和夫「おかん塚石室発掘の記」伊那14-6 1966年
- 4 松尾昌彦他「飯田市周辺における前方後円墳の実測調査」信濃34-11 1982年
- 5 飯田市教育委員会『塚穴1号・2号古墳』1987年
- 6 白石太一郎「伊那の横穴式石室」信濃40-7・8 1988年

写真図版

図版 1



発掘前の状況



調査風景



同 上

閉塞石を奥壁より望む



同上拡大



同上拡大 (右傾めから)



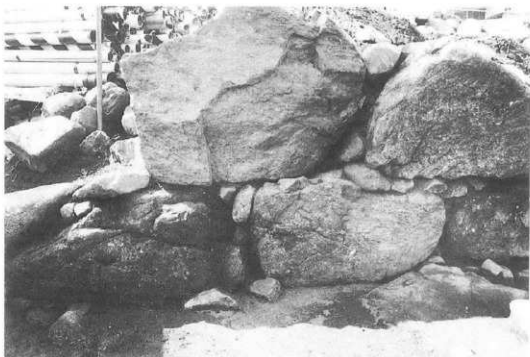
図版 3



右側壁の石積み（左側壁より見る）



同 上（奥壁より見る）



左側壁の石積み（右側壁より見る）



同 上（開口部より見る）

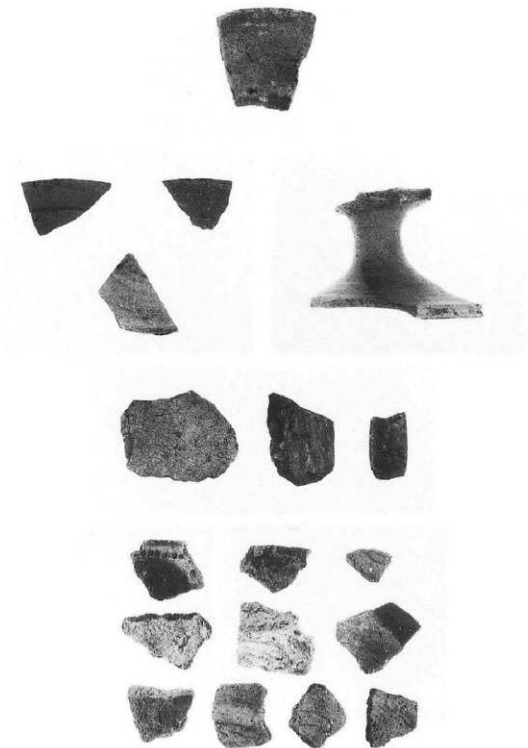
図版 5



石 室 (入口部より望む)



同 上 (入口部右傾めより望む)



出土遺物

樋 明 古 墳

宅地開発に伴う緊急発掘調査報告書

1991年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市大久保町2534番地
飯 田 市 教 育 委 員 会
印 刷 株式会社 秀 文 社

